

Shinano Male Choir

創価学会しなの合唱団 第32回定期演奏会

会場 **パルテノン多摩 大ホール**

入場無料 ※要入場券(全席指定)

日時 **2026年5月30日(土)**

15時00分開演(14時15分開場)

本日は、第32回定期演奏会にご来場、ならびにオンラインにてご視聴いただき、誠にありがとうございます。ご多用の中、私たちの演奏会に心を寄せてくださったことに、団員一同、心より感謝申し上げます。

創価学会しなの合唱団は、皆様の温かいご支援に支えられ、昨年11月、7年ぶりに全国大会へ出場し、銀賞を頂くことができました。日頃から応援して下さる多くの方々の励ましがあっての結果であり、改めて深く御礼申し上げます。これからも一音一音を大切にしながら、より豊かな音楽をお届けできるよう、地道な研鑽を重ねてまいります。

私たちは創価学会音楽隊として、音楽が人の心に寄り添い、希望や前向きな力を届ける存在でありたいと願ってきました。その思いを胸に、人々の生命を輝かせる喜びを音楽に込めて表現することを目指し、第32回定期演奏会のテーマを「歓喜」としました。創立者である師匠・池田大作先生は小説『新・人間革命 第5巻 歓喜の章』の中で、「使命に生き抜こうと決意した時、彼は、苦悩の雲を破って、歓喜の太陽が胸中に昇りゆくを感じた。」と記されています。また同章では、恩師・戸田城聖第二代会長が、獄中において使命を自覚することで、生命の奥深くから歓喜を見いだしていった姿が描かれています。現実社会を生きる私たちは、誰しも悩みや困難と無縁ではられません。しかし、これらの言葉に触れる中で、苦悩そのものを否定するのではなく、その只中で自らの使命に向き合い、前へ進もうとするところに、人が再び立ち上がる力が生まれるのだと教えられました。一人ひとりが、それぞれの人生の中で果たすべき役割や意味を見つめるとき、そこに困難を超えて生きる歓喜が育まれていくのではないのでしょうか。

本日5月30日は、79年前、森ヶ崎にて池田先生が長兄の戦死の報を受けられた日でもあります。その深い悲しみを越え、平和への誓いを胸に歩まれた師の思いを受け継ぎ、私たちも音楽を通して表現してまいります。

ここ、パルテノン多摩から「歓喜」の響きが広がっていくことを願い、心を込めて歌わせていただきます。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

創価学会しなの合唱団 団長 細田英輝

Shinano Male Choir



1st Stage

指揮: 笹口圭吾 / ピアノ: 前田勝則

男声合唱とピアノのための「修司の海」

短歌・作詩: 寺山修司 / 作曲: 三宅悠太

- I. 海を知らぬ少女の前に / かなかな啼けり
- II. 半分愛して
- III. 海のない帆掛船 / 泣いたままの壁の絵
- IV. サンゴ
- V. かなしくなったときは

2nd Stage

指揮: 前田大法 / ピアノ: 加藤大樹

男声合唱のための 「宮崎 駿アニメ映画音楽集 第2集」

編曲: 信長貴富

1. さんぽ
作詞: 中川李枝子 / 作曲: 久石 譲
2. いつも何度でも
作詞: 覚 和歌子 / 作曲: 木村 弓
3. めぐる季節
作曲: 久石 譲
4. やさしさに包まれたなら
作詞・曲: 荒井由実
5. さんぽ (finale)
作詞: 中川李枝子 / 作曲: 久石 譲

Intermission

3rd Stage

指揮: 小川正明 / ピアノ: 山尾正之

歓喜

「世紀の英雄」

作詞: 音楽隊有志 / 作曲・編曲: 大村一弘

「森ヶ崎海岸」

作詩: 山本伸一 / 作曲: 本田隆美 / 編曲: 杉野泰彦

「世界広布の歌」

作詞: 男子部有志 / 作曲: 有島重武 / 編曲: 杉野泰彦

4th Stage

指揮: 清水敬一 / ピアノ: 前田勝則

男声合唱とピアノのための「あらゆる日も夜も」

作詩: 川井麻希 / 作曲: 根岸宏輔

- I. 青
- II. 手
- III. おとのなみ



しみず けいいち

清水敬一 [指揮者] *Conductor*

1959年5月東京生まれ。1982年3月早稲田大学理工学部電気工学科卒業。指揮法を遠藤雅古、V.Feldbrill、合唱指揮を関屋晋の各氏に師事。現在十数の合唱団の指揮を任される。各地で合唱とオーケストラのための作品のコーラスマスターを務める一方、初演した現代作品も数多い。国内外の音楽祭・作曲コンクール・合唱コンクールの審査員を歴任。現在、JCDA日本合唱指揮者協会理事、東京芸術大学附属音楽高等学校講師。著書に『合唱指導テクニック』(NHK出版)、『合唱指揮者という生き方 私が見た「折々の美景」』(アルテスパブリッシング)。

ささぐち けいご

笹口圭吾 [指揮者] *Conductor*

大東文化大学文学部卒業。洗足学園音楽大学附属指揮研究所修了。指揮法を秋山和慶・河地良智、ピアノを島田玲子、橋本智紗、合唱指揮を清水敬一・清水昭の各氏に師事。関東各地で18合唱団の常任指揮者を任される。創価学会しなの合唱団を指揮し、全日本合唱コンクール全国大会にて度重なる金賞ならびに特別賞を受賞。江東区青少年少女合唱団を率いてオーケストラとの共演多数。同団の長年の指導により、江東区文化振興財団功労賞受賞。一般社団法人民主音楽協会主催「はじめての合唱指揮ワークショップ」をはじめ、各地の講習会や合唱祭の講師を務める。江東区文化センター講師、一般社団法人日本合唱指揮者協会会員。



まえだ かつのり

前田勝則 [ピアニスト] *Pianist*

山口県に生まれる。1998年東京学芸大学教育学部芸術課程音楽専攻卒業。2001年東京芸術大学大学院音楽研究科修了、修了時にNTTドコモ奨学金を授与される。ピティナ・ピアノコンペティションデュオ部門特級最優秀賞受賞をはじめとして、多摩フレッシュ音楽コンクール、日本室内楽コンクール、吹田音楽コンクール、大曲新人音楽祭コンクール、かずさアカデミア音楽コンクールなどに上位入賞。また、NHK-FM「土曜リサイタル」、東京文化会館新進音楽家デビューコンサート、ABCフレッシュ・コンサート、日演連推薦／新人演奏会など、多くの演奏会に出演。大阪フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉と協演。これまでに、佐川愛子、徳万良子、石橋史生、植田克己の各氏に師事。現在、ソロ、室内楽、及び声楽・合唱のピアニストとして活発な演奏活動を繰り広げている。





おぬきいわお
小貫岩夫 [ヴォイストレーナー] *Voice Trainer*

同志社大学卒業後、大阪音楽大学卒業。同志社時代は同志社グリークラブに所属しソリストとして一時代を築いた。音大在学中の95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演しデビュー。この成功により翌年、ケムニッツ市立歌劇場(ドイツ)に招聘出演し、二期会、新国立劇場を中心に活躍。07/10年二期会「魔笛」タミーノ役(実相寺昭雄演出)、11年佐渡裕プロデュース「こうもり」アルフレード役などで喝采を浴びた。近年は立て続けに二期会のオペレッタで主役を歌い、なくてはならない存在となっている。コンサートでも、主演オケとの共演で高い評価を得ている他、テレビ・ラジオにも度々出演。2010年から毎年、東京と大阪でリサイタルを開催し好評を得ている。2013年天皇皇后両陛下御親覧のチャリティボールで御前演奏し、お言葉を賜る他、フィレンツェではイタリア元首相夫妻主催のコンサートに招かれた。合唱の指導者としても関西学院グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団、立教大学グリークラブ男声、同志社グリークラブ、法政大学アカデミー合唱団などのヴォイストレーナー、大阪外国語大学グリークラブOB(東京)の指揮者として活躍している。二期会会員。東京藝術大学オペラ専攻非常勤講師。

かとうだいき
加藤大樹 [ピアニスト] *Pianist*

昭和音楽大学卒業、同大学院修了後、渡独。令和元年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修員及びDAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてミュンヘン音楽大学マイスタークラスを最優秀の成績で修了。現在、東京藝術大学、昭和音楽大学、創価大学にて非常勤講師を務める。第48回パルマ・ドーロ国際ピアノコンクール第1位及びドンツドルフ賞、第7回東京音楽コンクールにおいて審査員満場一致の第1位及び聴衆賞など数多くの受賞歴を持つ。これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、パデレフスキ・フィルハーモニー交響楽団など国内外有数のオーケストラとの共演を重ねるほか、近年では室内楽の分野でも活躍の場を広げる。

これまでに江口文子、アンティ・シーララ、エイドリアン・エティカーの各氏に師事。

公式ホームページ daikikato.com



かわぐち さ や か
川口紗弥加 [司会] *Master of Ceremonies*

東京都出身、俳優。2023年縦型ショートフィルム『レンタル部下』がカンヌ国際映画祭×Tik Tok Short Filmコンペティションにてグランプリ受賞。最近の主な出演作に映画『ダブル・ライフ』、『ほどけそうな、息』、ドラマ『アングリースクワッド EPISODE ZERO』、広告『JWマリオットホテル東京』等。

WEBSITE: <https://tomoessayakawaguchi.com/>

1st Stage 男声合唱とピアノのための「修司の海」

短歌・作詩：寺山修司／作曲：三宅悠太

I. 海を知らぬ少女の前に／かなかな啼けり

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

海の記憶もたず病みいる君のためかなかな啼けり身を透きながら

II. 半分愛して

半分愛してください

のこりの半分で

だまって海を見ていたいのです

半分愛してください

のこりの半分で

人生を考えてみたいのです

III. 海のない帆掛船／泣いたままの壁の絵

海のない帆掛船ありわが内にわれの不在の銅鑼鳴りつづく

海風きていつも泣いたままの壁の絵

I. 海を知らぬ少女の前に／かなかな啼けり

冒頭を飾るのは、寺山修司が10代の頃に詠んだ短歌です。瑞々しく鮮やかな青春の息吹を、全身で受け止めるような響きで紡がれています。連続して演奏される「かなかな啼けり」にも、一人の少女が登場します。病に伏せる少女と、短い命を懸命に鳴き継ぐ蝉。その共存の中に宿る修司の語彙の美しさが音楽に込められているかのようです。

II. 半分愛して

「のこりの半分で だまって海を見ていたい」という静かな願いが、ブルース調の音楽で描き出されています。修司の紡いだ情感が自然に溢れ出ることが意図され、主旋律とそれを支える和声的な伴奏で、ホモフォニックを基調に作曲されています。浜辺の穏やかで寂しげなひと時が、哀愁感漂うサウンドで演奏されます。

III. 海のない帆掛船／泣いたままの壁の絵

この組曲の中核をなす間奏曲(=インテルメッツォ)としての性格を持つ作品です。テキストは1950年代後半～60年代初頭にかけての修司の作品で、入院生活により外界(海)から隔離された自身の孤独を、「海のない帆掛船」や「不在の銅鑼」といったイメージで描いています。動き出したい衝動と、それができない自己不在の感覚を、動かない絵の比喻で描く二つの詩句から着想を得た音楽は、そのもどかしさを、静謐で内省的な響きの中に映し出します。曲全体には、ピアノの一部の弦を常に解放状態(残響を止めない状態)で演奏し続けることで共鳴空間を作り出す、ハーモニクス奏法が散りばめられていて、神秘的に共鳴し、重なり合う響きの中に、その時々的心象風景が描かれます。

IV. サンゴ

サンゴ礁のかなたには
なにがあるの?
ときいた少女があった

私はこたえた
しあわせの国があるのだ と

どうしてあんなうそをついたりなど
したのだろう

サンゴ礁のかなたには
ただ青い青い海と
戦争をこらえているいくつかの
国があるばかりなのに

深い桃色のサンゴの耳飾りを
見るたびに
私は考える
あの少女も大きくなって
子供に

「サンゴ礁のかなたには
なにがあるの?」
ときかいたら
やっぱりこたえるだろう
「しあわせの国があるのだ」と

サンゴよ サンゴ 桃色サンゴ
しあわせの国について思うたび
いつも心では
はるかな海が鳴っている

IV. サンゴ

「サンゴ礁のかなたには なにがあるの?」少女の問いかけから始まる、ひとつの幻想的な物語です。詩の情景変化と呼応するように、音楽も鮮やかなコントラストを描きながら展開します。作詩された1960-70年の当時は、安保闘争という激動の時代。「戦争をこらえているいくつかの国」というフレーズには、ベトナム戦争をはじめとする当時の国際情勢への冷徹な視線が混じっています。現実が残酷であるからこそ、あえて「しあわせの国」という嘘をつく。この「虚構によって現実を生き抜く」という姿勢は、修司の演劇思想とも合致します。中間部のア・カペラへ至る直前、ピアノが奏でる微かな予兆は、やがて終盤「サンゴよ サンゴ」の部分から荘厳なコラルへと昇華され、大団円を形作ります。

V. かなしくなったときは

修司にとって「海」とは、原風景そのものだったのではないか。彼の全集に並ぶ膨大な言葉の数々に触れるとき、そこにある孤独や憧れ、あるいは過去への追憶の傍らには、常に「海」の存在が感じられます。そんな着想のもとに作られたこの曲集の最終章です。修司における「海」の定義、あるいは一つの到達点とも言えるこの詩が終曲に配されています。それまでの章で積み上げられた緊張や混沌から解き放たれすべてが透明に澄み渡っていくような、浄化の章として曲集は締めくくられています。

V. かなしくなったときは

かなしくなったときは
海を見にゆく

古本屋のかえりも
海を見にゆく

あなたが病気なら
海を見にゆく

こころ貧しい朝も
海を見にゆく

ああ 海よ
大きな肩とひろい胸よ

どんなつらい朝も
どんなむごい夜も
いつかは終わる

人生はいつか終わるが
海だけは終わらないのだ

かなしくなったときは
海を見にゆく

一人ぼっちの夜も
海を見にゆく

2nd Stage

男声合唱のための「宮崎 駿アニメ映画音楽集 第2集」

編曲：信長貴富

さんぽ

作詞：中川李枝子／作曲：久石 譲

あるこう あるこう わたしはげんき
あるくの だいすき どんどんいこう

さかみち トンネル くさっぱら
いっぽんばしに でこぼこじゃりみち
くものすくぐって くだりみち

あるこう あるこう わたしはげんき
あるくの だいすき どんどんいこう

みつばち ぶんぶん はなばたけ
ひなたにとかけ へびはひるね
ばったがとんで まがりみち

あるこう あるこう わたしはげんき
あるくの だいすき どんどんいこう

きつねも たぬきも でておいで
たんけんしよう はやしのおくまで
ともだちたくさん うれしいな
ともだちたくさん うれしいな

いつも何度でも

『千と千尋の神隠し』の主題歌として知られる『いつも何度でも』には、少し意外な誕生の物語があります。この曲はもともと、制作途中で実現しなかった別企画の映画のために書かれたものでした。

木村弓氏が宮崎監督に手紙を添えて直接送ったCDがきっかけとなり、その音楽に心を動かされた宮崎監督によって、本作で用いられることになります。

覚和歌子氏による歌詞は、「自分を癒すような歌を作りたい」という作曲者の思いを受け取り、静かに、しかし確かな強さをもって綴られています。派手ではないけれど、確かに心を支える言葉。

その言葉の一つひとつを、男声合唱ならではの重層的な響きとともに、お届けします。

さんぽ

『となりのトトロ』のオープニングを飾る『さんぽ』は、映画とともに長く親しまれてきた名曲です。

この歌詞を手がけた児童文学作家・中川李枝子は、『ぐりとぐら』など数々の絵本で知られ、宮崎駿監督がその作品世界に強い衝撃を受けたことから、作詞を強く希望されたと言われていました。

「あるこう あるこう」という言葉には、中川自身が子ども時代に見た風景や実際に歩いた道の記憶が重ねられています。

この旋律は『となりのトトロ』だけでなく、『崖の上のポニョ』の劇中でもさりげなく歌われ、物語の世界を越えて生き続けています。

男声合唱による演奏では、軽快さの中に落ち着いた温もりが加わり、大人になってからの「さんぽ」の楽しさが感じられるかもしれません。

歩くことそのものが喜びになる。そんな素朴なひと時が、このステージの扉を開きます。

いつも何度でも

作詞：覚 和歌子／作曲：木村 弓

呼んでいる 胸のどこか奥で
いつも心踊る 夢を見たい

かなしみは 数えきれないけれど
その向こうできっと あなたに会える
繰り返すあやまちの そのたび ひとは
ただ青い空の 青さを知る
果てしなく 道は続いて見えるけれど
この両手は 光を抱ける

さよならのときの 静かな胸
ゼロになるからだが 耳をすませる

生きている不思議 死んでいく不思議
花も風も街も みんなおなじ

めぐる季節

作曲：久石 譲

この編曲では、
歌詞ではなくスカットで歌われます

めぐる季節

『めぐる季節』は、『魔女の宅急便』の中で流れる旋律として生まれ、のちに歌詞が付けられた楽曲です。

今回は、言葉を持たないインストゥルメンタル風の編曲として演奏されます。季節が巡るように、私たちの気持ちや環境も少しずつ変わっていきます。この曲は、そんな時間の流れそのものを描いているかのようです。

男声合唱の豊かな和声が、旋律に奥行きを与え、懐かしさと前向きさが静かに交差します。

言葉がないからこそ、聴く人それぞれの記憶や情景が浮かび上がる——

そんな余白を大切にしたい一曲です。

やさしさに包まれたなら

作詞・曲：荒井由実

小さい頃は 神さまがいて

不思議に夢を かなえてくれた

やさしい気持ちで 目覚めた朝は

おとなになっても 奇蹟はおこるよ

カーテンを開いて 静かな木洩れ陽の

やさしさに包まれたなら きっと

目にうつる全てのことは メッセージ

小さい頃は 神さまがいて

毎日愛を 届けてくれた

心の奥に しまい忘れた

大切な箱 ひらくときは今

雨上がりの庭で くちなしの香りの

やさしさに包まれたなら きっと

目にうつる全てのことは メッセージ

カーテンを開いて 静かな木洩れ陽の

やさしさに包まれたなら きっと

目にうつる全てのことは メッセージ

やさしさに包まれたなら

『やさしさに包まれたなら』は、もともとCMソングとして生まれた楽曲でした。

荒井由実氏がキャンディを口にした瞬間に浮かんだという「包まれたなら」という言葉は、やがて多くの人の心に寄り添う名曲へと育っていきます。

『魔女の宅急便』では、当初は書き下ろし曲が依頼されていましたが、宮崎監督の提案によってこの既存曲がエンディングに採用されました。

結果としてこの歌は、主人公キキの「今」の気持ちだけでなく、これから歩んでいく「未来」をも祝福する役割を担うことになります。

男声合唱の柔らかな響きは、この曲の持つ“やさしさ”をさらに広げ、穏やかな余韻を残します。

世界はきっと、思っているよりも“やさしい”——

そんな「希望」を胸に、音楽は静かに締めくくられます。

3rd Stage

歓喜

世紀の英雄

作詞：音楽隊有志／作曲・編曲：大村一弘

おお 決断の 我らは征く
誇りと使命を 胸に秘め

無敵の剣^{つるぎ} 高く抜き
世紀の英雄 いざや行進

おお 革命の 我らは征く
厳しく優しき まなざしは

万^{ばん}葉の友を^{いだ} 抱き寄せ
世紀の英雄 いざや快進

おお 連勝の われらは征く
真^{まこと}の栄光 浴びながら

歌えや共に 獅子の歌
世紀の英雄 いざや前進
世紀の英雄 いざや前進

『世紀の英雄』は1999年、新世紀へ前進する行進曲として、音楽隊有志によって誕生した曲です。

この曲には、力強く勇気を呼び覚まし、民衆を鼓舞する英雄の心意気が込められています。池田大作先生からの、「今再び、新世紀に向かう歌を、二十一世紀の新しいマーチを、各方面の青年部の有志で作ってはどうか」という呼びかけに呼応し、音楽隊メンバーが中心となって作詞・作曲に取り掛かりました。

試行錯誤は数十回におよび困難を極めましたが、広布に走る同志のためにと、昼夜を分かたず譜面と格闘して、師弟の共戦譜を完成させました。

いかなる権威・権力をも跳ね除け、全人類の幸福と世界平和の新世紀を切り拓く英雄の“歓喜”をお届けします。



Lyrics/Program notes

森ヶ崎海岸

作詩:山本伸一/作曲:本田隆美/編曲:杉野泰彦

きしべ
岸边に友と 森ヶ崎
いそか
磯の香高く 波かえし
十九の青春 道まよい
哲学語り 時はすぐ

まず
友は悩めり 貧しけれ
キリスト
基督の道 われ行くと
ひとみ
瞳きびしく 月映えて
こどう
つよき鼓動に 波寄せり

くず
崩れし土手に 草深く
いかなる虫か 知らねども
こよい
今宵は詩歌を つくらんと
かく
楽 平安の 念いあり

もく
されども友は 黙しけん
いかに生きなば わがいのち
しんえん
深園の月に 飛びゆかん
ぬぐ ひたん
涙を拭い 悲歎あり

こしゅう
友の孤愁に われもまた
無限の願望 人生を
ちか
苦しみ開くと 誓いしに
ほほえ
友は微笑み 約しけん

友の求むる 遠き世に
わ おの
たがうも吾れは 己が道
ちょうか
長歌の舞台 涯しなく
しらがみ
白髪までも 月語る

君に幸あれ わが友よ
つぎに会う日は いつの日か
わかれたび
無言のうちの 離別旅
銀波ゆれゆく 森ヶ崎
ル ルルル・・・・

プログラムノート執筆:大村 清

世界広布の歌

作詞:男子部有志/作曲:有島重武/編曲:杉野泰彦

ゆうこん
見よ雄渾の気は満ちて
はくせつ
白雪輝くヒマラヤの嶺
きざ こうが
歴史を刻む黄河の流れ
理想に燃えて我等征く
ああ 世界広布の意気高し

若き理性の団結は
きずな
人類救う勝利の命綱
はた
正義の旗幟に力あり
第三文明打ち建てん
ああ 世界広布の時来たる

うたごえ
学会健児の謳声は
とどろ
七つの海に轟き渡り
じゆ あまか
若き地涌の天翔ける
たた へいわきょう
ともに讃えん平和境
ああ 世界広布の鐘は鳴る
ああ 世界広布の鐘は鳴る



『森ヶ崎海岸』は1947年、当時19歳の池田先生が作られた詩に、後年、曲がつけられて誕生しました。

戦後間もない時代の混乱期において、それまでの価値観が崩れ去った空虚さの中で、心ある青年たちは「いかに生きるべきか」を、真剣に模索していました。

若き日の池田先生もまた、キリスト教に入信することを決意した一人の友人と、月に照らされた森ヶ崎の海岸を歩き、人生の進むべき道について語り合いました。「自分は身体も弱く生活も苦しいが、人々のために貢献できる、堂々たる人生を開こうと思う。お互いに頑張ろう。」と、固い握手とほほえみを交わし、二人は別れていきました。激動の青春を駆け抜けた若き日の池田先生が、生きる道を定めた歩みに宿る“歓喜”の詩をお聴きください。

『世界広布の歌』は1963年、「新しい時代の愛唱歌を作りたい」という青年たちが、一人立つ池田先生の想いに呼応しようと決意を込めて作曲されました。

会長就任から間もない池田先生は、青年たちに向けて、世界に目を向け、自ら行動していくことの大切さを語られました。そして自らもその先頭に立ち、前例のない海外への挑戦を始めます。

その大闘争の中、青年たちから「自分たちの殻を破り、先生とともに、平和のために世界に羽ばたいていこうな、気宇壮大な歌を作ろうじゃないか」という思いが生まれ、新しい時代を象徴する歌として広がっていきました。

世界192カ国・地域にまで轟き渡った世界広布という“歓喜”を、決意と真心の旋律で奏でます。

4th Stage

男声合唱とピアノのための「あらゆる日も夜も」

作詩：川井麻希／作曲：根岸宏輔

I. 青

この世界に
薄く溶けるように存在していたじぶんを
ある日突然知ってしまった
はっとした
鼓動を感じる
こんなに確かに心臓は動いているのに
どうして今まで気づくことなく生きてきたのだろう

この鼓動するからだを
じぶんというものを
溶かしたままではいられない
色をもつ一個として立ってちゃんと
生きていきたい

空はなぜ
ただ広く青いそれだけで
空なのだろう

誰にも見とめられないのなら
この手や目に何の意味があるだろう
なまえを呼ばれることもない
誰にも見えないからだをもち
誰の耳にも届かない声を叫び

いつか消えると
日々強く知るそれだけが生きる意味ならば
いっそ

薄く溶けるように存在していた青さも消えれば
鮮やかな輪郭を
浮き上がらせて不在を主張
するか
ら

I. 青

作詩・川井麻希氏、作曲・根岸宏輔氏によって生み出された本曲集は、日常の何気ない風景の中に潜む、言葉にならない感情をすくい上げています。

一曲目の『青』では、それまで無自覚に生きていた“じぶん”という命を、ある瞬間に強い自覚を持って捉え直す瑞々しい感性そのものが描かれています。

鼓動し、名前を持ち、肉体という重みを持って「一個として立ってちゃんと生きていきたい」と願う“じぶん”。それに対して、実体を持たずともただ広く、誰に呼ばれずとも圧倒的な在り方でそこに存在する“空”。

この鮮烈な対峙の中で、私たちは自身の不確かさに揺れ、時に嫉妬や焦りさえ覚えます。しかし、そうした心のざわめきこそが、今この瞬間を生きている証に他なりません。薄く溶けるように存在していた“じぶん”が、空の青さと向き合うことで、何色にも染まらない存在として初めて輪郭を持ちます。

自らの命を“じぶん”のものとして痛切に自覚したとき、不安を凌駕し今ここに「在る」ことへの根源的な歓喜が生まれるのです。

刻一刻と過ぎゆく時間を刻むピアノと、寄せては返す波のように反復する合唱が命の鼓動を高鳴らせ、突き抜けるように踏み出す生命の輝きを鮮やかに描き出します。

※作曲上、付曲されていない箇所があります。『あらゆる日も夜も』(土曜美術社出版販売)所収

II. 手

目を閉じる
闇夜からそっと伸びてくる
やわらかく温かい手のひらが
まるくなった背中を撫でる
やさしく やさしく
そのやさしい手のひらの感触だけが
わたしを鼓動させている
星が瞬くように 風が頬を吹くように
とても自然でさりげない
けれども意思のあるその手にゆるりほどかれて
わたしの背中は輪郭を失い夜にとける
とかかれて今日を終える
また光が迎えにくるまでわたしは
その手に解放されて
夜にまじる

II. 手

この曲で描かれる『手』とは、単なる身体の一部ではなく、孤独な夜に寄り添い、静かに心をつなぐ温もりの象徴です。詩の世界では、眠りにつこうとする赤ん坊の視点から、その背をそっと撫でる手のひらが描かれています。それは特定の誰かの手である以上に、夜そのものが持つやさしく撫でてくれるような慈しみのお手です。その感触は、星が瞬き、柔らかな風が頬をなでるように、あまりに自然でさりげないものです。しかし、そこには単なる自然現象とは異なる、孤独を慰め、命を守り抜こうとする確かな「意思」が宿っています。手のひらから伝わる温もりを通じて、私たちは自分が決して独りではなく、大きな夜の優しさに包まれている存在であることを本能的に受け取ります。やがて訪れる「夜にまじる」瞬間は、心地よいまどろみの中で深い眠りへと落ち、自分という境界が消えて夜と一体になるような、無垢な充足感を描き出します。静かな闇へと溶けて無に帰っていく至福。その絶対的な安心感の中にこそ、混じりけのない純粋な喜びが息づいています。皆様も、夜の優しさに抱かれるような温かな響きに、そっと身をゆだねてみてください。

III. おとのなみ

音のひとつひとつが重く垂れて
ついには落ちる
しずくとなる無数の雨がそうするように
ゆるりゆるり抱きあって
抱えきれずについには落ちる
大きな水滴のように
まるくふくらみ落ちるそのしずくは
みぞおちの
奥のくぼみの深いところに
波紋をひろげ静かに落ち着く
それは
暗雲からこぼれる雨とおなじ
濾過された透明さをもつ
黒く渦まき五線譜から
浮きあがり集まって垂れるしずくは
震えさせ薄く波立たせるしなやかさで
重なりあい響きあって
ついには夏の夕立になる
その日その一瞬
雨はついに海をなし
すべてを波に包んでいく

III. おとのなみ

終曲『おとのなみ』は、それまで紡がれてきた繊細な感情が、次第に大きなうねりとなって溢れ出していきような、豊かな響きに満ちた楽曲です。「おとのなみ」によって奏でられる旋律が重なり合い、空間を満たしていく音楽のうねりが私たちの心を波立たせます。押し寄せる音の波は、時に力強く、時に優しく、私たちが歩んできた「あらゆる日も夜も」包み込むように響き渡ります。自分という個の響きが、他者の声やピアノの音と溶け合い、一つの大きな共鳴へと昇華されていくプロセス。そこには、音の重なりによって自然に引き寄せられ、すべてを優しく包んでいくような、どこまでも深い慈しみが宿っています。すべてが共鳴し、溢れ出すような音の奔流の中で、皆様はどのような景色をご覧になるでしょうか。それは、心を解き放ち、生きることを謳歌するような輝きかもしれません。「雨はついに海をなし すべてを波に包んでいく」——。押し寄せる「おとのなみ」に身をゆだね、音楽が描き出す広大な音の海を、共に感じていただければ幸いです。

母

生命の源である母。

家族の中心であり、心の支えである母。

私たちが何歳になっても、変わらぬ愛を注ぎ続けてくれる母。

母は、いつも私たちが温かく包み込んでくれる存在です。

1971年10月4日、池田先生は、偉大な母への感謝を込めて、長編詩『母』を執筆されました。

この詩をもとに、山本伸一の名で作詩、音楽大学出身の松本真理子さん・松原真美さんによって作曲されて誕生したのが、しなの合唱団が一番大切にしている曲『母』です。

『母』の作詞当時、池田先生の母^{いち}さんは、80歳手前で健康状態もすぐれない状況でした。そうした中であっても、一さんは常に力強く、優しく、そして慈愛に満ち溢れていました。池田先生は、そんな一さんの姿を、こう綴られています。

戦後、私が夜学に通ったころ、どんなに遅く帰宅しても、母は必ず起きて待っていてくれた。うどんを温めてくれては、「大変だったね。大変だったね」と、決まり文句のように言っていた。（『大道を歩む一私の人生記録』（毎日新聞社））

関東大震災によって生活が貧しくなった時。

戦争に息子たちをとられ、長男を失い悲しみにくれた時。

度重なる不幸と災難、その風雪に耐え、なおも温かく家族を支え続けた母。

一さんは、どんな冷たく暗く辛い環境でも、家族に希望を与え、心を照らしてくれる太陽でした。

その偉大な愛は、世界中の母にも重なります。今もなお、世界では争いが絶えず続いています。貧困や飢餓、地球温暖化も解決に至っていません。日本でも東日本大震災や熊本地震、能登半島地震と激甚災害が続き、能登半島地震から二年がたった今でもその傷は癒えていません。

不安定な時代だからこそ、人と人との温もり、母のように包み込む愛が、私たちの心の拠り所となるのではないのでしょうか。

池田先生は『母』の曲について、こう語られました。

音楽は世界共通の言葉である。文化や民族の違いを超えて理解しあえる。そこには平和がある。そして“母”には、人はみな格別の思いがある。ゆえに、私はこの『母』の曲を、世界の全ての母たちに捧げる——

私たちしなの合唱団は、この思いを胸に全国、全世界の母へ歌います。あなたの願いが翼となおおぞらって天空に舞いくる日まで。

プログラムノート執筆：堀家海舟

母

作詩：山本伸一／作曲：松原真美・松本真理子

母よ あなたは
なんと不思議な ^{ゆたか}豊富な力を
もっているのか
もしも この世に
あなたがいなければ
^{かえ}還るべき大地を失い
かれらは永遠に ^{とわ} ^{さすら}放浪う

母よ わが母
風雪に耐え ^た ^{いのり}悲しみの合掌を
^く ^{かえ}繰り返した 母よ
あなたの願いが翼^{つばさ}となって
^{おおぞら}天空に舞いくる日まで
^{たっしや}達者にと 祈る

母よ あなたの
思想と聡明^{かしこ}さで 春を願う
地球の上に
平安の楽符^{しらべ}を ^{かな}奏でてほしい
その時 あなたは
人間世紀の母として 生きる
その時 あなたは
人間世紀の母として 生きる

Member list

TopTenor

東 伸作 ★
伊藤翔平
大村 清 ★
亀岡真広 ★
佐藤正弘
林 孝大
藤代光一
山尾正之
山崎晃義 ★
渡邊竹王

SecondTenor

阿部竜太 ★
池本清史
大岡正勝
近藤脩平
杉尾隆輔 ★
鈴木英一
鈴木俊明 ★
永野 宙
菱田光明
堀家海舟 ★
山川裕一 ★

Baritone

小川正明
柏木 真
工藤大輝
佐藤正夫 ★
清水秀一郎
鈴木明男
高野俊明
津本光一
細田英輝 /団長
前田大法

Bass

石谷孝太 ★
太田幸一 ★
川口賢二 ★
熊倉 顕 ★
幸福康大
鈴木正彰
大悲山直人 ★
谷 拓宣 ★
福本伸敏 ★
山崎伸明
和賀寿樹

Pianist

加藤大樹

Staff

大塚 学
恩徳秀信
小柴宏徒 /副代表
坂上貴浩
佐藤敢太
星 満生 /代表
山根大知

★定期演奏会実行委員

Links



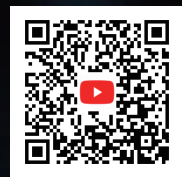
website



facebook



X (旧 Twitter)



YouTube